仲間外れを表す「ハミ」「ハブ」「ハネ」類の言語調査
—現代大学生の孤立性・分断状況を探る—

椙　村　知　美
林　　伸　一

要旨

かつて1970年前後の全共闘運動の中からは「連帯を求めて孤立を恐れず」という言葉が出てきたが,現代の大学生を見ていると「連帯を求めず孤立を恐れる」学生が多いように思われる。1983年に任天堂からファミコンが発売され，現代の大学生は生まれた時からゲームやビデオなどで一人ででも楽しく遊べる環境の中で育ってきている。最近は，インターネットや携帯電話の急速な普及で，言語や友人環境にも影響を及ぼしている。「仲間外れ」を表わす言葉として「ハミ」類,「ハブ」類,「ハネ」類がどのような地域で使用されているかを調査した。その量的なデータに関連して,大学生をとりまく日本社会はどのような言語環境・人間環境となっているかを考察した。

キーワード

大学生　　孤立性　「ハミ」類　「ハブ」類　「ハネ」類

1　はじめに

「仲間外れ」をあらわす「ハミ」「ハミゴ」「はみろう」「はみる」(以下「ハミ」類),「ハブ」「ハブコ」「はぶろう」「はぶる」(以下「ハブ」類),「ハネ」「ハネコ」「はねよう」「はねる」(以下「ハネ」類）が各地域でどのように使用されているかをアンケート調査した。

アンケートの設問は，次の４種類の文章を示し，それぞれの文に「A. 使う　B. 知っているが使わない　C. 聞いたことがない」の三肢択一で回答する形をとった。

1．私を<u>ハミ</u>にしている３人のうち1人が，最近部活を辞めると言い出した。
2．仲良かった友達のグループから<u>ハミゴ</u>にされた。
3．グループの人たちが花子を無視して花子を<u>はみろう</u>としていた。
4．二人組を作るとき，奇数だったら絶対一人<u>ははみる</u>じゃん。

なお，左記のアンケートの設問の下線部にそれぞれ「ハブ」類,「ハネ」類の調査対象語を入れ替え，合計12の文章を示し，自由記述欄も設けた。(別添資料参照)

若者言葉と思われているような調査対象語も地域方言の要素が強いことがわかった。本調査対象の大学（高専）がどのような出身地の学生が集まっているのかも併せて示す。

2　北海道の大学における調査結果

調査対象大学がある北海道旭川市は，北海道の中央部に位置し，札幌市に次いで北海道で２番目に大きな都市である。男性42人，女性38人，合計80人の調査結果である。出身地は以下の通りである。

北海道(71)，青森・茨城(各２)，秋田・宮城・埼玉・滋賀・島根(各１)

北海道出身者が全体の９割を占めている。西日本出身者はほとんどいない。北海道の中でも大学の所在地の旭川市出身の学生が多い。

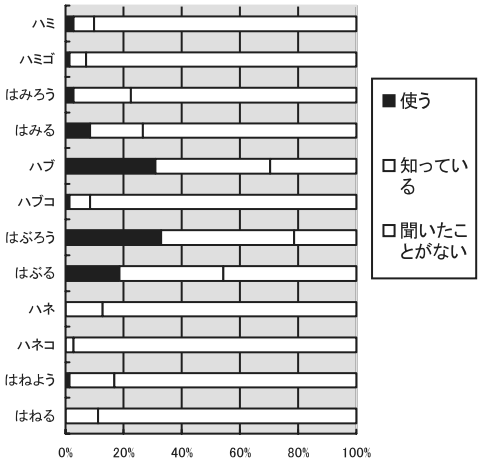

図１　北海道出身の大学生の使用状況

図１に示したように，最も使用が多かったのは「はぶろう」で使用率は30％を超えている。認知率と合わせると80％近くになる。「『ハブ』類以外聞いたことがない」（北海道出身・大学生）の声からも，「ハブ」類は広まっている様子が窺える。「ハブ」も使用率は約30％だが，認知率と合わせると70％と高い。その他使用率＋認知率が過半数を超えているのは「はぶる」であった。

次に，「ハミ」類の使用が見られるが，使用率がすべて10％未満であるため，北海道で広まっているとは言いがたい。使用が多かった「はみる」は使用率と認知率を合わせると30％近くある。

「ハネ」類は使用者がほとんどおらず，北海道では使用されていないと考えられる。

３　宮城県の大学における調査結果

調査対象大学がある宮城県仙台市は人口100万人を超す東北地方最大の都市である。男性20人，女性25人，合計45人の調査結果である。出身地は以下の通りである。

宮城(18)，岩手(５)，山形・福島(各４)，青森・山梨・富山(各２)，秋田・長野・栃木・埼玉・群馬・茨城・静岡・東京(各１)

宮城県が最も多く，東北地方出身者が大半を占めている。また，近畿地方以西の出身者はいない。東北地方を中心とした東日本地域の大学生の使用実態が把握できる。

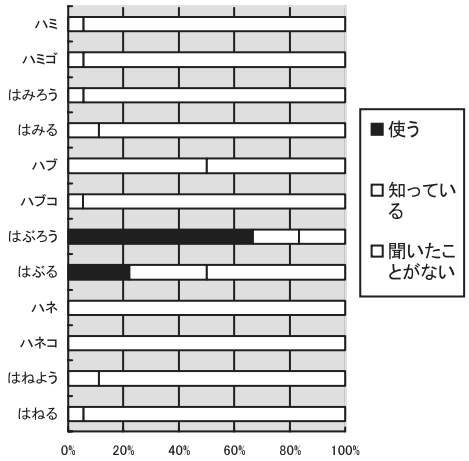

図２　宮城県出身の大学生の使用状況

図２に示したように，西日本で使用されている「ハミ」類や「ハネ」類がないことが特徴的で，認知率も低い。

最も多かったのは北海道と同じく「はぶろう」であった。使用率は約70％近くあり，認知率と合わせると90％近くになる。「ハブ」の使われていないが認知率は，50％程度ある。使用者はいないが，耳にする言葉であることが分かる。

「はぶる」も使用率は20％を超えていて，認知率と合わせると50％になる。「ハブ」類は『日本国語大辞典』(2001)に示されているように，静岡や島根で使用されていた言葉である。辞書類での東北地方での「ハブ」類の使用の記述は見られないことから，大学生への広がりを考えると，新しく東北地方に入ってきた言葉だと推測できる。

「はぶろう」と「はぶる」という動詞の使

用率が突出している点が特徴的である。

４　東京都の大学における調査結果

東京都八王子市にある大学で調査し，男性49人，女性134人の合計183人で，圧倒的に女性が多い調査結果である。出身地は，以下の通りである。

東京(38)，大阪（23)，神奈川(13)，兵庫(12)，広島(９)，北海道(８)，岐阜(７)，福岡(６)，愛知・山口(各５)，埼玉・京都(各４)，宮城・千葉・静岡・三重・奈良・和歌山・徳島・愛媛(各３)，青森・茨城・新潟・山梨・岡山・宮崎・沖縄(各２)，秋田・山形・福島・群馬・富山・長野・滋賀・鳥取・熊本・大分・鹿児島(各１)

最も多いのは大学の所在地である東京で38人である。関東地方の学生が多いが，次いで大阪出身の学生が23人で，関西圏の学生も相当数を占めている。北は北海道から南は沖縄まで全国から学生が集まっている大学である。

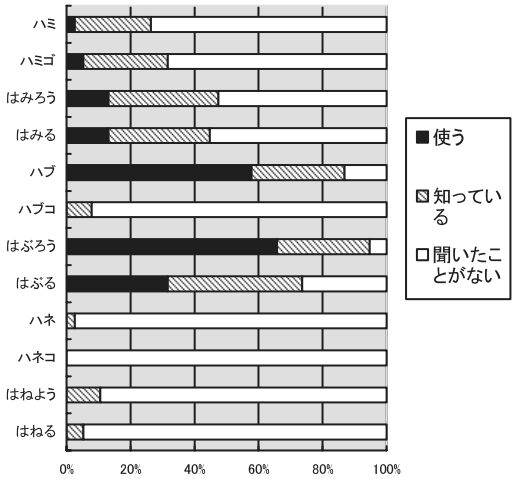

図３　　東京都出身の大学生の使用状況

図３に示したように，最も使用が多かったのは「はぶろう」で使用率60％を超え，使用率＋認知率は90％を超えていた。

「『ハブ』類しか知りません」（東京都出身・大学生)との回答からも首都圏では「ハブ」類が使用されていることがわかる。

「はぶろう」の次に「ハブ」の使用者が60％近くおり，認知率は90％近い。

「『ハブ』類に関して，小・中・高生の時はよく使っていたような気がするが，大学生になってからは全く使わなくなったように思う」（東京都出身・大学生)という回答からも東京都では，小・中学生から「ハブ」類が広がっている様子がわかる。大学生になってからは全く使わなくなったという学生がいる一方で,「大学内で『はぶられる』『はぶられた』などの言葉を聞いたことがあります。私は『省かれる』→『除かれる』というふうに連想して理解していました」（東京都出身・大学生）との回答もある。

「ハミ」類の中では，使用率が20％を超えているものはなかった。しかし，「はみろう」や「はみる」は使用率と認知率を合わせると半数近くなる。大学構内に近畿地方出身の学生が多いことが影響しているのではないかと考えられる。近畿地方の学生だけをみると，その使用は過半数を超え，認知率と合わせると８割以上の学生が知っている。しかし，東京出身の学生にはほとんど認知されていないようで，全国的な広がりを見せない一因と考えられる。

「ハネ」類は使用者はおらず，認知率もきわめて低かった。

５　石川県の大学における調査結果

調査対象の大学の所在地は石川県金沢市で，北陸の中心都市として加賀百万石の城下町としても栄えた。男性31人，女性94人の合計125人の調査結果である。出身地は以下の通りである。

石川(48)，富山(16)，福井(13)，新潟(７)，静岡・滋賀・長野(各４)，北海道・和歌山・兵庫(各３)，秋田・群馬・山梨・鳥取(各２)，岩手・宮城・山形・福島・栃木・埼玉・東京・奈良・岡山・広島・香川・福岡(各１)

石川県が最も多く，全体の３分の１を占める。富山県と福井県を入れ北陸３県の占める割合は61.6％で，過半数が北陸地方の出身者が占めている。次に新潟県と続く。

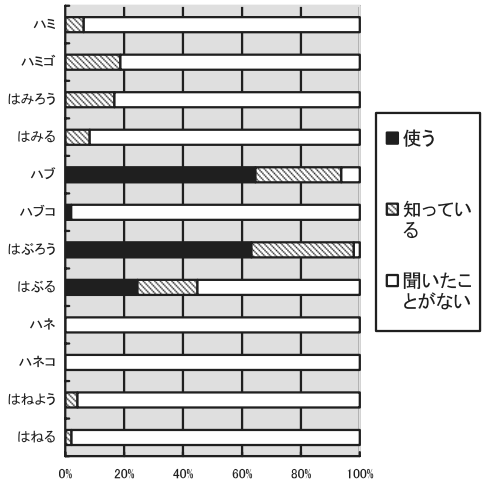

図４　　石川県出身の大学生の使用状況

図４に示したように，最も使用が多かったのは「ハブ」類であった。「はぶろう」は使用率60％以上と高く，認知率と合わせると90％近くになる。「ハブ」も使用率60％以上，認知率と合わせると90％を超えている。「ハブ」類は大学生の間でかなり浸透している言葉だと言えよう。

「学校で誰かをからかう気持ちを含んで仲間外れにするときに使う」（石川県出身・大学生）や「友人間でふざけて『お前なんかハブやし！』と使う」（石川県出身・大学生）との回答を得た。からかったりふざけたり軽い感じで使用している様子が窺える。

金沢大学では仲間はずれの「ハバにする」の使用が確認された。石川県出身者だけでも自由記述に11人の学生が「ハバ」類を使うと記していた。「ハバ」類を調査項目に挙げていたら，さらに使用者が増えたであろう。愛知・岐阜・石川出身者が「ハバ」類を使用するとしており，本州を横断する形で「ハバ」類の使用が認められる。

「ハミ」類の使用者は，48人の石川県出身者の中に一人もいなかった。北陸地方の石川県には伝播していないと考えられる。

「ハネ」類も全く使用者がいなかった。

６　岐阜県の大学における調査結果

調査対象大学の所在地は岐阜県岐阜市で，男性22人，女性31人，合計53人の調査結果である。出身地は以下の通りである。

岐阜(28)，愛知(18)，滋賀（３），千葉・兵庫・広島・大阪（各１）

岐阜県と愛知県の出身者が多数を占め，東海地方の言葉が勢力を持っている。

次の図５を見てもわかるように，最も使用が多かったのは「ハブ」と「はぶろう」であった。それぞれ，使用率は40％前後あり，認知率と合わせると70％を超えている。特に「ハブ」は，ほとんどの学生が認知している。

「『ハバ』なら使います」（岐阜県出身・大学生）のような記述の回答が複数見られた。この地域では「ハバ」類が勢力を持っていることがわかる。別途の聞き取り調査でも，老年層から少年層まで「ハバ」類が使われていた。もともと「ハバ」類が使用されていた地域に，若年層の「ハブ」類の使用が加わったと考えられる地域である。

「ハブ」類は静岡県では古くから使用されている言葉だが，中年層での使用者がいないため，この地域の「ハブ」類は，放送や漫画などのメディアを通して若い世代に広がったのではないかと推測される。

「『ハブ』は悪意が入った印象」（岐阜県出身・大学生）との回答から，新しく入ってきた「ハブ」類は従来の「ハバ」類よりきつい印象を与える言い方として使用されていることが推察できる。

「ハミ」類の使用者はいなかった。東海地方の学生が圧倒的多数のため，近畿地方で使われる「ハミ」類の威力は弱いようである。

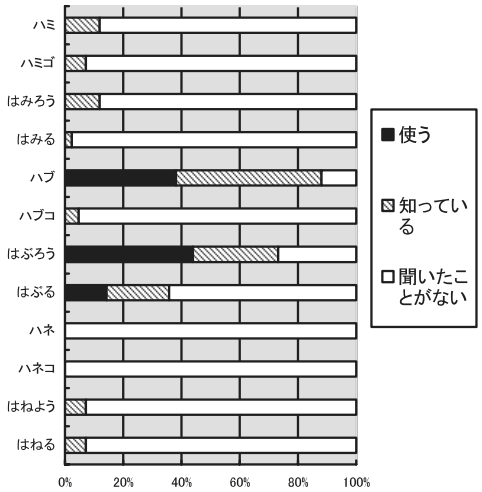

図５　岐阜県出身の大学生の使用状況

「中学・高校時代は『ハミ』類を使用していた。私の地域では使っていないが『ハブ』類は知っている」（兵庫出身・岐阜の大学生）との回答もあった。大学に進学し，他の地域に住むことにより，新たな言葉を耳にする機会が増える様子がわかる。

「ハネ」「ハネコ」は使用者がまったくおらず，認知率もゼロであった。

７　愛知県の大学における調査結果

調査対象大学の所在地は愛知県刈谷市である。名古屋市などは，人口が多い地域である。

男性25人，女性66人の合計91人の調査結果である。出身地は以下の通りである。

愛知(66)，岐阜(14)，静岡(５)，福井(２)，群馬・富山・石川・愛媛(各１)

愛知県出身者が３分の２を占めている。

次の図６に示したように，最も多かったのは「ハブ」で，使用率は30％程度と高くはないが認知率と合わせると70％となる。

もともと「はばにする」を使っている地域であるが，「中学生になって『はぶる』を使ったり，聞いたりし始めるようになった(愛知県出身・大学生)との回答から，中学生という多感な時期に「ハブ」類が使用語彙に加わった様子が窺える。聞き取り調査でも老年層でも「ハバにする」が聞かれた。

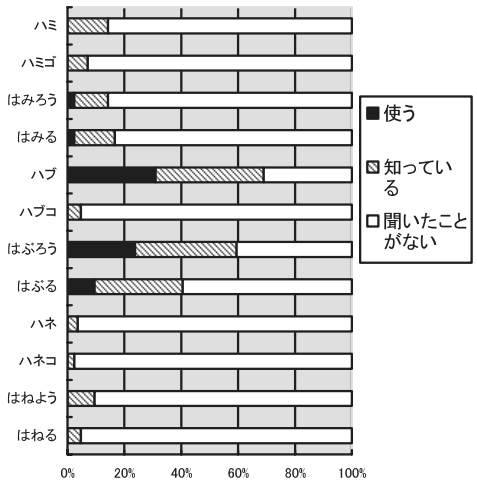

図６　愛知県出身の大学生の使用状況

次に「はぶろう」の使用も20％を超え，認知率と合わせると60％になることから広がりを見せていることがわかる。

「一人だけはぶる際に小学生くらいの子が使っているのを聞く」（愛知県出身・大学生）との回答からも，大学生より年齢が下の世代にも定着していっているようだ。

「ハブ」類は，もともと愛知県の隣県である静岡県では使用が老年層にもあったが，愛知県では若い世代でのみ使われており，若者言葉としての使用だと考えられる。

「ハミ」類は，ほとんど使用者がいなく，「ハネ」類の使用者もいなかった。

８　三重県の高専における調査結果

調査対象の工業高等専門学校は，圧倒的に男性が多い学校で，所在地は三重県熊野市にある。男性51人，女性1人の合計52人の調査結果である。出身地は以下の通りである。

三重(31)，和歌山(７)，愛知(３)，奈良(２)，秋田・長野・栃木・埼玉・群馬・茨城・静岡・東京・大阪(各１)

三重県出身者が大半を占め，次に隣の和歌山県，愛知県と続く。近畿地方の学生が多い。

次の図７に示したように，最も使用が多い語は，「はぶろう」で20％を超え，「ハミゴ」は，20％に届いていない。ただし，「ハミゴ」「はみろう」「はぶろう」の使用率と認知率と合わせると約50％になる。

その他，「ハミ」を見ると，使用者は少ないが認知者と合わせると40％以上ある。

「『ハミ』類以外はあまり使わない」（三重県出身・10歳代高専生）との聞き取り調査の回答からも，近畿地方出身者が多い地域では「ハミ」類を使用することは少なくても，耳にする機会が多いことが窺える。

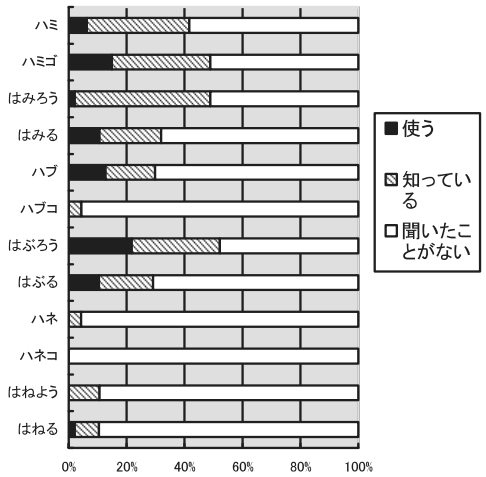

図７　三重県出身の高専生の使用状況

別途実施した聞き取り調査から，三重県は従来から「ハブケ」と使用していたことがわかった。そのため三重県は，新しく入ってきた「ハミ」類と「ハブ」類の使用が，ぶつかり合っている地域だと考えられる。しかし，使用率はどの語形も多くないため，現段階ではどの語が優勢に使用されているかはっきりしない。

「ハネ」類は，使用者も認知者もほとんどいなかった。

９　大阪府の大学における調査結果

調査対象大学の所在地は大阪府茨木市にある。女子大学のため全員女性100人の結果である。出身地は以下の通りである。

大阪(46)，兵庫(16)，奈良（８），京都・滋賀・和歌山（各６），岡山（３），石川・沖縄（各２），静岡・岐阜・福井・鳥取・高知（各１）

大学の所在地である大阪府の出身者が全体の約半数を占める。次に隣県である兵庫県が多く，関西地方の出身者が８割である。

「ハミ」類の使用は関西地方が多いため，大阪府の出身者のみの結果を図８に示す。

次の図８に示したように，大阪府の出身者を見ると，「ハミ」類が最も多く使われていることがわかる。「ハミ」の使用率は低く，認知率と合わせて30％未満である。「ハミゴ」は，使用率が50％で認知率と合わせると90％以上である。「聞いたことがない」と答えたのは一人だけであった。

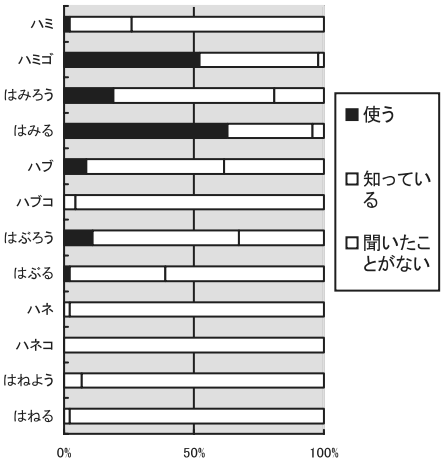

図８　大阪府出身の大学生の使用状況

「ハミ」類は，「小学生や中学生の時に一番よく聞いた。特にグループ分けなどの場面で聞くことが多い」（大阪府出身・大学生）のように，グループ分けの場面でよく使っていたと記した人が多かった。大学生になると，グループや班活動などの機会が減るために，使

用することも自然に少なくなるのだろう。「はみろう」は使用率20％未満であったが，認知率と合わせると80％を超える。「はみる」に関しては，使用率が「ハミ」類の中で最も高く60％以上であった。認知率と合わせると90％を超える。「ハミ」類は，「ハミ」という形を除き８割以上の学生がどの語形も知っている。

「ハブ」類の使用率は低いものの，認知率は高い。「ハブ」「はぶろう」に関しては使用率と認知率を合わせると60％以上である。「ハブ」類が放送や漫画などのメディアを介して伝わり，「ハミ」類が有力な大阪にも伝播していることが推定できる。

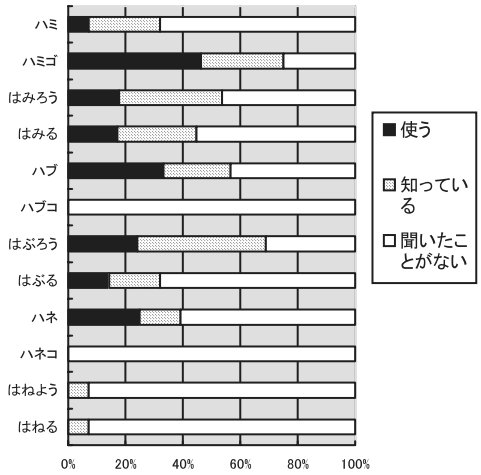

図９　広島県出身の大学生の使用状況

10　広島県の大学における調査結果

広島県東部の尾道市にある大学における男性17人，女性72人の合計89人の調査結果である。女性の方が圧倒的に多い。出身地域は以下の通りである。

広島(28)，岡山(11)，兵庫・島根・香川・大分(各５)，静岡・愛媛(各３)，山口・佐賀・長崎・鹿児島・北海道(各２)，大阪，福岡，鳥取，熊本，徳島，高知，宮崎，富山，沖縄，岐阜，福井，三重，栃木，和歌山(各１)

出身県をみると，大学の所在地である広島が一番多く，岡山がそれに続いている。中国地方の学生が多い。東日本の出身者は少なく，広島県近辺の大学生に関しても「ハミ」類の使用が多いことが予想された。

次の図９に示したように，広島出身者のうちで最も多かったのは「ハミゴ」であった。使用率は50％を超え，認知率と合わせると70％以上の人が使用または認知している語と言える。

次に使用が多かったのは「ハブ」で，約30％の人が使用しており，認知率と合わせると60％近い。

「はぶろう」も20％を超す使用率があり，認知率と合わせると約70％となる。

広島県の特徴として「ハネ」の使用が挙げられる。この尾道の地域で古くから使用されていた「ハネ」は使用率が20％を超えており，アンケート調査語の中では使用率が高い。「ハネ」類しか用いないという学生は数人しかおらず，ほとんどが「ハブ」類と「ハミ」類を併用していた。「ハミゴ」の使用が最も多い。聞き取り調査でも，広島県では，「ハミ」類，「ハブ」類，「ハネ」類の調査対象語すべての使用が認められた。

11　山口県の大学における調査結果

調査対象大学の所在地は山口県山口市である。広島県と福岡県に挟まれているため両県の出身者も多い。男性205人，女259人の合計464人の調査結果である。出身地は以下の通りである。

山口(112)，福岡(78)，広島(64)，長崎(26)，岡山(23)，大分(20)，兵庫・島根・佐賀(各16)，宮崎(10)，鳥取・愛媛・熊本(各９)，鹿児島・大阪(各８)，静岡(７)，奈良(４)，福井・埼玉・神奈川・岐阜(各３)，北海道，東京，愛知，香川，徳島，高知(各２)，山形・新潟・

石川・栃木・沖縄(各１)

大学の所在地である山口県出身者が全体の４分の１を占めている。次に福岡，広島の学生が多い。中国地方，四国地方の学生が全体の大半を占め，関西以東の学生は少ない。

次の図10に示すように，最も多かったのは「はぶろう」で112名中，49名が使用していた。認知している学生は38名で，77.6％の学生が使用または認知している。その他,「ハブ」「はぶる」を使用する学生も全体の約４分の１いた。「はぶろう」に比べて，「聞いたことがない」と答えた学生も多かった。

「ハミ」類はほとんど使用者がおらず，瀬戸内地方では兵庫・岡山・広島に比べて「ハブ」類の使用が高い。「ハミ」類の使用率の低さから，山口県では使用者が少ないと考えてよいであろう。

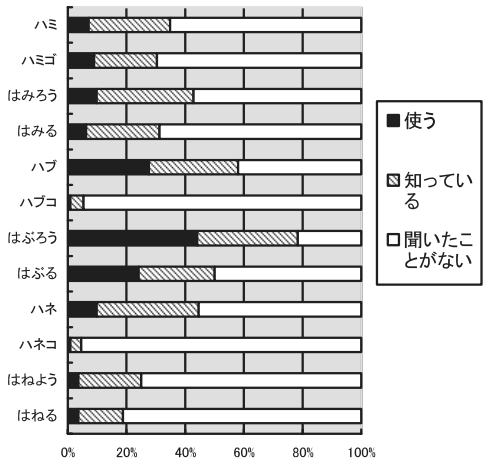

図10　山口県出身の大学生の使用状況

聞き取り調査で少年層にも「ハミ」類が広がっていないことから，大学生は「ハミ」類を使用する地域の学生と接触する機会が多いために３割程度の人が認知しているのではないかと考えられる。

「ハブ」類の使用は，放送や漫画などのメディアによる伝播と隣接する福岡県からの影響ではないかと考えられる。

「ハネ」類に関しては，「ハミ」類と同様，認知している学生はいるが,「ハネ」を11名使用すると答えていた。112名の学生のうち約１割の使用率である。認知率と合わせると50％近くあることから，聞き取り調査からも同世代ではなく中年層や老年層が使用しているのを「聞いたことがある」と答えた人が多くなったのであろう。

12　香川県の大学における調査結果

香川県高松市にある大学における男性12人，女性40人，計52人の調査結果である。出身地域は以下の通りである。

香川(24)，岡山(14)，徳島(３)，鳥取・山口・愛媛(各２)，長野・京都・広島・熊本・宮崎(各１)

大学の所在地である香川県出身者が全体の約半分を占めている。次いで岡山県出身者が多い。瀬戸大橋を利用して電車で岡山駅から約一時間で通学できる。実際に，岡山出身者の中には電車で通学してくる者も多く，岡山県の言葉の影響を受けやすい環境にある。

次の図11に示したように,「ハミ」類の使用の多さが目立つ。特に,「はみる」は使用率が90％以上と高く,「聞いたことがない」と答えた人はいなかった。

「『はみる』は仲間外れなどイジメ以外にも人数が余ったりするだけでもふざけて使う」(香川県出身・大学生)との声からも「はみる」が軽い意味で広がっている様子がわかる。

名詞より動詞の方が多く「はみろう」が60％の使用率であった。「ハミゴ」は使用率＋認知率が90％とほとんどの大学生が「知っている」言葉である。

「ハミ」は使用率10％未満と少なかったが，その使用は岡山出身者が多かった。

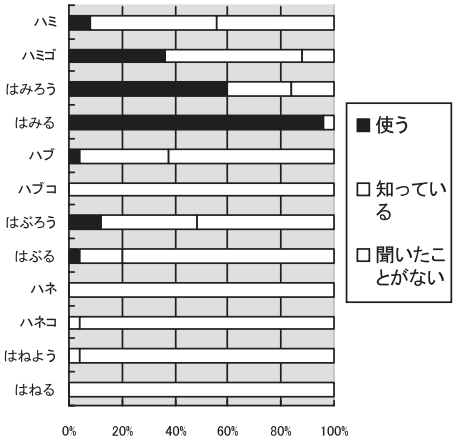

図11　香川県出身の大学生の使用状況

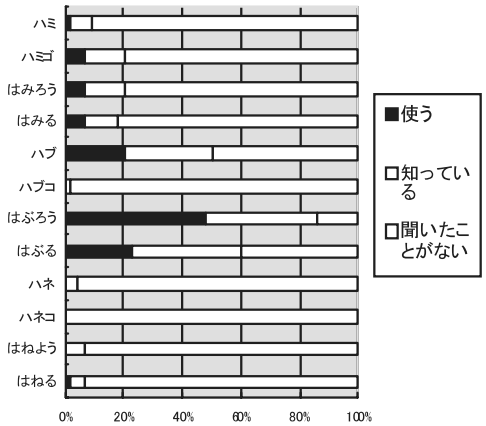

図12　福岡県出身の大学生の使用状況

「以前は『ハブ』を使っていたが，いつの間にか『ハミ』の方を使うようになった」（岡山県出身・大学生）の回答から，「ハブ」類が岡山で広がりかけたが，「ハミ」類の方が優勢になったことがわかる。

「ハブ」類を見てみると，使用率はどれも20％未満と低い。「『はぶる』は意図的に仲間の輪から外しているイメージ」（香川県出身・大学生）の回答から，「はみる」に比べ「はぶる」の方がきつく感じられるようである。「はぶろう」は認知率と合わせると40％を超えていることから，知っているが「ハミゴ」類の方を使用する傾向が強いことがわかる。

13　福岡県の大学における調査結果

福岡県北九州市にある女子大学における女性60人の調査結果である。出身地域は以下の通りである。

福岡(44)，大分（４），長崎・佐賀・山口（２），兵庫・島根・熊本・宮崎・奈良・高知（１）

人口約100万人の都市にあり，地元出身の学生が大半を占めている点が特徴である。福岡県生まれ福岡県育ちで，特に北九州市の学生が多かった。

図12に示したように，最も多いのは「はぶろう」で，使用率は50％，認知率と合わせると90％近くになる。

「『ハミ』類や『ハネ』類は聞いたことがない」（福岡出身・大学生），「『はぶろう』は中学生や高校生の頃使っていた」（福岡出身・大学生）の回答からも，福岡での「ハブ」類の使用が多いことがわかる。

聞き取り調査では，若年層以下に使われており，新しく広がった言葉だと言える。「はぶる」は使用率20％以上，認知率と合わせると60％を超えている。名詞よりも動詞が多く，特に意志形の「はぶろう」が突出して使われていた。名詞の「ハブ」は使用率約20％，認知率は60％弱である。「聞いたことはある」が使用するまでには至っていないようである。

「ハミ」類は最も多い「ハミゴ」で10％と，ほとんど広がりを見せてないことが分かる。福岡県は九州地方の中心的な存在であり，いわば「言語ボス」にもなりやすい位置を占めている。「ハミ」類は九州地方では広がりにくい要素を持っていると考えられる。

「ハネ」類関しては使用者がいなかった。

以上が北海道から九州福岡までの「仲間外れ」を表わす言葉「ハミ」類,「ハブ」類,「ハネ」類の調査結果である。

14 「仲間外れ」を表わす語のコード化

米川（1997）は,『若者ことば辞典』の中で,「はみご（はみ子)」という見出し語を立てて「仲間外れにすること。またされること。また，そうされた人。『はみ』『はみーず』とも言う」としている。

本調査を実施した椙村（2005a，2005b）は，当初「若者ことば」としての位置づけのもと象徴的に「はみご」類とコード化し，インターネット調査，アンケート調査と分析を進めていた。しかし，他の類義語の「ハブ」類，「ハネ」類との関連から，「はみご」類とするよりも「ハミ」類とコードを揃えたほうがよいとの判断から，本稿では「ハミ」類とした。

前項までの調査結果から,「ハミ」類は，主に近畿地方を中心に中国地方や四国地方で使用され,「ハネ」類は，かつて西日本地域で使用されていたが，現在は中国地域に限定されていることがわかった。「ハミ」類と「ハネ」類は「地を這う伝播」で広がっており，東日本にまでその使用が広がらなかったと見てよいであろう。

「ハブ」類は，全国的に広がりを見せているが,「ハミ」類は東日本ではほとんど使用されていない。

「ハブ」類の使用率が最も高かったのは，石川県で，認知率と合わせると90％以上と広がりを見せている。その他，東京都では「はぶろう」が，岐阜県では「ハブ」の使用率＋認知率が約90％と高かった。宮城県では「はぶろう」の使用率＋認知率が80％以上になっている。

「ハミ」類,「ハブ」類,「ハネ」類は，地域により使用率と認知率に差異があり，地域方言の要素が強いことがわかった。

15　分析と考察

以上「仲間外れ」を表わす言葉「ハミ」類,「ハブ」類,「ハネ」類の使用と認知に関して量的な調査を実施したが，同調査の自由記述の部分から，以下のような用法の違いや意味の軽重の差異，さらには語の使用背景として大学生の孤立性や分断状況などが見えてきたので，質的な問題として考察を加えたい。

15.1　軽い意味合いの「ることば」的用法

椙村(2005a)によると「今後はいっしょにハミろうか」のような「自主的ハミゴ」もあり，必ずしもいじめなどの加害者「はみる」と被害者「ハミゴ」の関係ではない場合もあると指摘している。

本調査でも広島県において「ハミ」類が優位であったが,大学生の場合,被害者的な「ハミゴ」というよりも，あえて孤独を楽しむような自主的・意図的「ハミゴ」の用法も存在するであろう。

授業などを「サボる」とほぼ同義語で「ハミる」と用いられることもあり，軽い意味合いにもなりうる。椙村（2005ｂ）は,「ハミる」を「サボる」「無視る」「ダブる」などと同列の「ることば」と位置付けて社会言語学的考察をしている。

「ることば」との命名は，集団語や若者語の研究者である米川（1996）による。

香川県では,「はみる」「はみろう」「ハミゴ」の順で使用率が多く，他府県から突出している。動詞の「はみる」と「はみろう」が名詞の「ハミゴ」を上回る使用率で用いられており，生々しく動的な言語表現として生きていることがわかる。

「『はみる』は仲間外れなどイジメ以外にも人数が余ったりするだけでもふざけて使う」(香川県・大学生)との回答は，アンケートの設問文の「二人組を作るとき，奇数だったら絶対一人は**はみる**じゃん」に呼応する。

例えば，授業中に二人一組のペア・ワーク（pair-work）をする際，単に半端の奇数が出てしまう場合などに用いられる。このように「はみる」は軽い意味から深刻な重い場合まで幅広い意味範囲をカバーしていることがわ

かる。

「ハブ」類が優勢な石川県でも，「学校で誰かをからかう気持ちを含んで仲間外れにするときに使う」(大学生)とのコメントや「友人間でふざけて『お前なんかハブやし！』と使う」(大学生)との回答から，からかったりふざけたりして使用していることがわかる。

上記の例のように「はぶろう」という意向形で用いなくても「お前なんかハブやし！」と言えば，仲間外れにする加害者の側の発言となる。いじめる側は，特にいじめようと思っていなくても，からかったりふざけたり軽い冗談を言っているだけなのに，言われた側は深刻に受け止めてしまうのがイジメの構造である。

教員などの第三者からもいじめ，いじめられている関係とは気づかない場合もある。

アンケートの「私をハブにしている3人のうち1人が，最近部活を辞めると言い出した」のように複雑な人間関係を部外者にはわからないように表現する場合もある。

米川（2000）は，『集団語辞典』において，集団語の機能として「皆に通じる必要がないので，ヨソ者にはわからないことばである」という特徴をあげている。

15.2　社会方言の要素

「ハミ」類，「ハブ」類，「ハネ」類は，地域方言の要素が強いが，「一人だけはぶる際に小学生くらいの子が使っているのを聞く」(愛知県・大学生)「中学生になって『はぶる』を使ったり，聞いたりし始めるようになった」(愛知県・大学生)「小学生や中学生の時に一番よく聞いた。特にグループ分けなどの場面で聞くことが多い」(大阪府・大学生)「『ハブ』類に関して，小・中・高生の時はよく使っていたような気がするが，大学生になってからは全く使わなくなったように思う」(東京都・大学生)などの回答から，年齢層によって使ったり，使わなかったりする階層方言・社会方言の特徴もある。

おそらく男女間の性別による差異もあるだろうが，男女対等のアンケート結果が得られなかったため，本稿では検討できない。

椙村・林（2005）は，「ハミ」類を生徒同士で用いる「生徒方言」にカテゴリー化している。小中学校の義務教育段階で，「ハミ」類，「ハブ」類，「ハネ」類が使用され，大学生になると使用率は減ってくると思われるが，それは仲間外れの実態がなくなることを意味しているわけではない。

東京都や大阪府の調査との関連で，「グループ分けの場面でよく使っていたと記した人が多かった。大学生になると，グループや班活動などの機会が減るために，使用することも自然に少なくなるのだろう」との分析と解釈を示したが，それは教育実態を表しているとも言えるであろう。

つまり，小学校・中学校ではクラス単位や班活動などのグループ学習が多いのに対して，単位制高校や大学の授業は，学生が個人個人で科目を選んで移動して履修し，クラス単位で行動することはない。また，高校や大学では，学生に知識を教え込む一方的な授業が多くなる傾向がみられる。大学生の行動面での自由度は高いが，意識としては個々人バラバラの状態にあり，クラブ・サークル活動は別として，集団としての結束性が乏しい。

単位制高校でもホーム・ルーム機能はあって，諸連絡やクラスとしての最低限の結束性は保てるようなシステムになっている。大学でも学生が個々分断されていて，友達づくりを促進するために方策として，1年次から「基礎セミナー」などを設けて，いわばホーム・ルームのような機能を持たせようと工夫している。クラス編成をしている大学もある。

15. 3　現代の大学生の孤立・分断状況

各地の仲間外れの言葉を調べていくうちに特徴として見えてきた部分は，「はぶろう」と

いう意向形（意思形）が多く用いられているあるいは認知されている点である。

北海道，宮城県，東京都，石川県，岐阜県，愛知県，三重県，山口県，福岡県などで「はぶろう」の使用率＋認知率が優勢であった。

「はぶろう」という意向形で用いるのは，仲間はずれにする側の使用で，イジメなどの場合には加害者側の視点に立っている発話の用法である。

アンケートの提示文「グループの人たちが花子を無視して花子を**はぶろう**としていた」という設問の文意も，無視することのイジメ（無視る・シカト）の状況を表している。

「ハミ」類が優位な大阪では,「はみる」「ハミゴ」が優位で,「はみる」は仲間外れにする意であり，受身的・被害的「ハミゴ」は，結果としていじめられている立場を表現していることが多い。「テンション上げないとハミられる」などと被害の受身形で用いられることが多い。

同じく「ハミ」類が優勢な香川県では,「『はぶる』は意図的に仲間の輪から外しているイメージ」（大学生）との回答が得られ，同じ動詞であっても「はみる」に比べ「はぶる」の方が，よりきつく感じられるようである。

また「『ハブ』は悪意が入った印象」（岐阜県・大学生）との回答があったように，攻撃的な言語表現として「ハブ」類が悪意を込めて使用されることもある。

大学生の場合，就職先も内定し，卒業論文も通る内諾を得ている段階なのに，突然自殺してしまうようなケースがある。その本当の理由は本人しかわからない暗闇の底のような状態にある。つい昨日まで冗談を言っていた人気者の学生が，首をつった状態で発見されたという不可解なことも起こりうるのである。

現代の大学生には，人知れず「仲良かった友達のグループからハブにされた」というような孤立感があるのかもしれない。同じゼミ生同士でも，意図的に食事会やコンパを企画し，実行しないとなかなか助け合うきっかけがつかめず，協力的な関係が築けない。

たとえコンパを開いても，その場は盛り上がるのだが「テンション上げないとハミられる」などと強迫観念にとらわれている場合もある。実際は，大学生活に不適応の状態であるのにも拘わらず，必死に「ハミられない」ように無理をして，義理を果たしているのかもしれない。

外国人留学生の日本社会への不適応は，よく問題にされることがあるが，実は日本人学生も地元以外の大学へ進学した場合などに，周りの環境に不適応状態に置かれている場合がある。（林，2008a参照）

たとえ日本人であっても「もし集団のちがいを無視した行動を導くような考え方や好みを身につけてしまうと，その社会にうまく適応できなくなる」（山岸，2002）という状況に陥る。

また，都会の学生などは,「酔いつぶれた友だちを置いて何時の間にか，誰もいなくなってしまう」（千石，1985）というような若者の薄情ぶりが目立つようになってきたと言われている。

酔いつぶれた友だちは,酔いから醒めて「仲良かった友達のグループから**ハブ**にされた」という深い孤立感を味わうことであろう。

千石（1985）は,「若者たちは,『みんなで渡れば怖くない』という徒党の中で生きている。一人になることを極端に恐れている」としている。一見，徒党を組んでいるようだが,実態はただ群れているだけで，ひとり一人は「ハミゴ」意識を持っているかもしれない。

15.4　元気のない大学生

1970年前後の大学キャンパスでは，学生同士が大学食堂やクラブの部室などで，口角泡を飛ばし，熱い議論を戦わせていた光景が見られた。

しかし，現代の大学生を見ているとあえて

議論してまで「連帯を求めず」，ひたすら孤立（ハミゴになること）を恐れて，他者に気を遣いながら静かに行儀よくしている学生が多いように見える。むしろ，外国人留学生の方が熱心に議論し，元気と活気があるのに対して，日本人学生は，喧嘩もせず，おとなしく総じて元気がないように見える。

林（2007）も日本文化の「場の倫理」の中で，激しい論争になるような場面があったとしても,「まあまあ」とその場をまとめる「紛争回避型」の行動をとる日本人学生の特徴を示している。

まじめに議論をしようとする学生に対して他の学生が「あんまりカリカリすんなよ」とか「何キレてるんだよ」と議論を収めてしまう。議論を収拾しようとする側は，議論が沸騰する状態を乱れている状態と捉え，落ち着いて穏やかに話すことを第一の望ましいことと捉えている。争いや動揺を静めるだけであれば，いいのかもしれないが，議論の内容をそれで終わりにすることが多く，それ以上の発展が期待できなくなることが問題である。

学生に限らず，教員も「波風たてないようにするのが美徳」との価値観のもとに行動していることが多いようである。

中国人学生や韓国人学生などが，せっかく日本に留学したのだから，日本人学生と歴史認識などの問題をとことん腹を割って話したいと思っているのに，日本人学生に旅行の話や食べ物の話に話題を転換されてしまうとこぼすことがある。（林，2008ｂ参照）

最近は「腹を割って話す」「胸襟を開く」という日本語の慣用句も死語になってしまったのではないかと思われるほど，とことん話し合う姿が日本人同士でも見られなくなってきているように思われる。

大学生の場合も，わざわざ構成的グループ・エンカウンター（Structured Group Encounter）といった「しかけ」（エクササイズ）を意図的につくらないとなかなかホンネと本音でぶつかることがなくなってきている。

千石（1985）の指摘は，一気飲みが盛んに行われた時代のことで,「一気，一気」と手拍子を打って酒を飲む学生の姿があちこちで見られた。最近は大学側が健康のためとアルコール・ハラスメント（アルハラ）防止のために，一気飲みをやめるように呼びかけている。そういう事情もあってか，キャンパスは静まりかえっている。

「まじめの崩壊」を指摘した千石（1985）は,「懸命に生きる人間が集団から異端者扱いされることさえある」としている。そういった異端者扱いが本稿の「ハミ」類,「ハブ」類,「ハネ」類などの仲間外れの表現と意識に関連していると思われる。

山岸（2002）は,「自分が集団主義的に行動するのは，そうしないと大変な目にあうからしかたなくそうしている」という場合を検討している。そのような場合の「大変な目」とは，村八分的な仲間外れにあうことを指していると思われる。

山岸（2002）は，次のように述べている。「集団のなかで仲間から冷たく扱われたり，村八分にされたりした場合，集団主義社会のなかで，あなたにはほかに行き場がありません。人々が内集団ひいき的に行動している集団主義社会では，自分の集団を追い出された人や，自ら自分の集団を離脱した人をほかの集団の人たちが温かく扱ってくれないからです」。

ここでいう「自分の集団を追い出された人や，自ら自分の集団を離脱した人」というのは，本報告の「ハミ」類「ハブ」類「ハネ」類などの仲間外れの語に相当する。

15.5　現代の大学生の閉塞状況

千石（1985）は，学生食堂や喫茶店での学生や生徒の様子を「4，5人でどやどやと入ってきて，テーブルに座ると，各人がマンガ雑誌を手に取って，互いに会話をしない。た

だ，側にいるだけ，つまりムレているだけで大人たちから見ると実に不思議な光景」と描写している。

最近の学生とは，マンガ雑誌を手に取る代わりに携帯電話でメールを打ち始めるぐらいの違いはあるだろうが，互いに会話らしい会話をしないで「ムレているだけ」という点は共通しているのではないだろうか。学生食堂や喫茶店は，恐ろしいほどまでに静かな状態を保っていることになる。

いずれにしても「ムレているだけ」というのは，「日本人は集団主義的に行動してはいるが，必ずしも集団に属することを好んだり，集団の利益を自分の利益よりも優先させる心を持っているわけではない」（山岸，2002）という状況に相当するであろう。

携帯メールでそれぞれの相手とは交信しているのであろうから，コミュニケーションがないわけではないだろう。

しかし，携帯を媒介にした「眼にみえないイジメ」もあると藤原（2006）は指摘している。携帯メールの返信が少しでも遅れると，無視（ハブ）が始まるとのことである。無視と書いて「ハブ」と読み仮名をふっている点は，「無視る」と「ハブる」の関係が密着していることを物語っている。風呂の中まで携帯を持ち込んでいる学生がいたり，友達と会話中にもメールを打ち始める学生がいたり，携帯を忘れて来たら不安でしょうがないという携帯依存症の学生がいるなど問題の根は深い。そういった「携帯依存症」の根は「失愛恐怖」（rejection anxiety）と「分離不安」（separation anxiety）にある。「失愛恐怖」とは，文字通り他者からの愛を失う恐怖で，他者から拒絶されるのではないかと不安でたまらなくなる情況に陥る。

「成長とは分離不安の克服である」と定義すれば，大学生は「学生」から「社会人」へと成長する時期にあたり，「分離不安」や「失愛恐怖」を克服していくのが発達課題として課せられていると考えられる。大学生にとって卒業に必要な単位をとることや就職先を見つけることだけが課題なのではなく，モラトリアム（社会的責任の猶予）を脱して，独立して生計を立てていく成人となることが最重要課題なのである。

16　今後の課題

大阪大学総長の鷲田清一は学部生のころを振り返って「友達との読書会が勉強のすべて」だったと述懐し，「一人では難しくて読めないヘーゲルやカントをみんなで一緒に読む」と必死で予習し，勉強になったと述べている。

喫茶店などが読書会の場として使われていたが，当時の読書会参加メンバーは，決して「ムレているだけ」ではなかった。

鷲田氏は「仲間同士で発表授業をして刺激を与え合う」勉強法を奨励している。そうすることが現代の大学生の孤立・分断状況という閉塞感を打破する鍵となるように思われる。現代の大学生が変われば，日本全体を覆っている閉塞状況も打破できると思われる。

ただ，自然発生的な「読書会」を期待していても，本を買う学生自体が少なくなった昨今の状況から，その実現性は薄いであろう。そうであれば，授業中の学生の発表形式を増やして互いに刺激し合うことも必要になってくると思われる。「演習」などのゼミの時間だけがプレゼンテーションの場ではなく，「講読」や「特殊講義」などの時間にも積極的に学生の発表の場を増やし，受講者間のシェアリング（sharing:分かち合い）の時間を確保するようにしたい。

また，前項で述べたような「分離不安」や「失愛恐怖」を克服していくというような人生におけるライフ・コース上の「独立成人期」の課題を自覚しておくことが大切であろう。

（東アジア研究科　学生）
（人文学部　教授）

謝辞：本稿のための言語調査にご協力いただいた方々に，この場を借りて感謝の意を伝えたい。謹んで心よりお礼を申し上げる。

【参考文献】

椙村知美（2005a）「学校社会における『はみご』についての考察」全国語学教育学会・日本教育カウンセラー協会発行『山口支部研究紀要』第10号，pp. 74－90

椙村知美（2005ｂ）「『ることば』の社会言語学的考察―『はみる』類を中心に―」全国語学教育学会・日本教育カウンセラー協会発行『山口支部研究紀要』第10号，pp. 63－73

椙村知美・林伸一（2005）「『はみご』類の社会言語学的考察―使用実態調査と分析―」山口大学文学会発行『山口大学文学会志』第55号，pp. 141－162

千石保（1985）『現代若者論―ポスト・モラトリアムの模索―』弘文堂

林伸一（2007）「場の倫理と個の倫理―日本事情としての考察―」山口大学文学会発行『山口大学文学会志』第57号，pp. 1－15

林伸一（2008a）「外国人留学生の日本社会への適応パターンと日本語教育の課題」山口大学大学機構発行『大学教育』第5号，pp. 109－119

林伸一（2008ｂ）「『和』の文化と『差』の文化―日本事情としての考察―」日本比較文化学会発行『比較文化研究』No. 82 ，pp. 81－92

藤原和博（2006）「公立高校再建なくして国栄えず」『文藝春秋』11月号，pp. 198-207

山岸俊男（2002）『心でっかちな日本人―集団主義文化という幻想―』日本経済新聞社

米川明彦（1996）『現代若者ことば考』丸善ライブラリー

米川明彦（1997）『若者ことば辞典』東京堂出版

米川明彦（2000）『集団語辞典』東京堂出版

鷲田清一・竹内洋（2009）「下流化した学問は復活するか」『中央公論』2月号，pp. 42－51

授業内での話し合い活動

資　料

言葉に関するアンケート

以下に示す「仲間外れにする」言葉について、使用地域、また使用者の年齢を調べています。１～12 の文中の下線部に対して当てはまる記号に丸を付けてください。「ハミゴ」類、「ハブ」類、「ハネ」類どれも使わないが、別の言い方をする場合は自由記述欄に記述をお願いします。

例　ゲームの話題について行けず、はみってしまった。
Ⓐ．使う　B．知っているが使わない　　C．聞いたことがない

①【ハミゴ類】

１．私をハミにしている３人のうち１人が、最近部活を辞めると言い出した。
　A．使う　B．知っているが使わない　　C．聞いたことがない

２．仲良かった友達のグループからハミゴにされた。
　A．使う　B．知っているが使わない　　C．聞いたことがない

３．グループの人たちが花子を無視して花子をはみろうとしていた。
　A．使う　B．知っているが使わない　　C．聞いたことがない

４．二人組を作るとき、奇数だったら絶対一人ははみるじゃん。
　A．使う　B．知っているが使わない　　C．聞いたことがない

②【ハブ類】

５．私をハブにしている３人のうち１人が、最近部活を辞めると言い出した。
　A．使う　B．知っているが使わない　　C．聞いたことがない

６．仲良かった友達のグループからハブコにされた。
　A．使う　B．知っているが使わない　　C．聞いたことがない

７．グループの人たちが花子を無視して花子をはぶろうとしていた。
　A．使う　B．知っているが使わない　　C．聞いたことがない

８．二人組を作るとき、奇数だったら絶対一人ははぶるじゃん。
　A．使う　B．知っているが使わない　　C．聞いたことがない

③【ハネ類】

９．私をハネにしている３人のうち１人が、最近部活を辞めると言い出した。
　A．使う　B．知っているが使わない　　C．聞いたことがない

10．仲良かった友達のグループからハネコにされた。
　A．使う　B．知っているが使わない　　C．聞いたことがない

11．グループの人たちが花子を無視して花子をはねようとしていた。
　A．使う　B．知っているが使わない　　C．聞いたことがない

12．二人組を作るとき、奇数だったら絶対一人ははねるじゃん。
　A．使う　B．知っているが使わない　　C．聞いたことがない

全体を通して何かご意見があればご記入下さい。

◎生育地＜出身地＞（　　）都道府県（　　）市町村　　◎性別（男・女）
◎年齢（10 歳代・20 歳代・30 歳代・40 歳代・50 歳代・60 歳代・70 歳代～）